

対談

守 破 創

グローバル化やデジタル化が急速に進展し、先行きが見通しにくくなっているこの時代に、社会を導くリーダーをどう育成するか。記憶重視の日本の偏差値教育はこのままでいいのか。少年時代から音楽に触れ、作曲家でもある浜田宏一・イエール大学名誉教授と、日本舞踊の稽古に励みながら映画で子役も務めた経験のある櫻井眞審議委員。それぞれの体験をもとに、次世代を担う人材の育て方について語り合った。



日本銀行政策委員会 審議委員

櫻井 眞

SAKURAI Makoto

1946年東京都生まれ。69年中央大学経済学部卒業、76年東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学、同年日本輸出入銀行入行、80年イエール大学経済成長センター客員研究員、89年日本輸出入銀行海外投資研究所調査研究グループ・開発経済グループ主任研究員、同年横浜国立大学海上基礎研究所研究部長首席研究員、90年横浜国立大学海上基礎研究所研究部長首席研究員、大蔵省財政金融研究所特別研究官、96年横浜国立大学海上基礎研究所国際金融研究センター所長、2007年サクライ・アソシエイツ国際金融研究センター代表、16年より日本銀行政策委員会審議委員。



イエール大学名誉教授・東京大学名誉教授・内閣官房参与

浜田宏一

HAMADA Koichi

1936年東京都生まれ。54年東京大学法学部入学、57年に司法試験第二次試験合格。58年同大学経済学部へ学士入学。65年経済学 Ph.D. (博士号) 取得 (イエール大学)。東京大学経済学部教授等を経て、86年イエール大学経済学科教授。2001年から03年まで内閣府経済社会総合研究所長。現在イエール大学、東京大学名誉教授。12年からは内閣官房参与も務める。『経済成長と国際資本移動——資本自由化の経済学』(東洋経済新報社)、『グローバル・エリートの条件』(PHP 研究所)、『国際金融の政治経済学』(創文社) など著書多数。16年1月にはCD『平和の鳩』(アート・ユニオン) を発表し、作曲家としてデビュー。

偏差値エリートはもういらぬ
芸事に触れて「真善美」を学べ

しんぜんび

覚悟を持って取り組んだ 金融論の研究と政策提言

櫻井 浜田先生とのお付き合いは、私が学生のころから始まり、半世紀近くになります。私は東京大学で先生に学んだ後、政府系の銀行等に勤めました。その間、国際金融に関係する仕事に携わっておりましたので、大学を離れてからも浜田先生には折々にご意見をうかがってまいりました。

浜田 思い返すと、櫻井さんが東京大学の院生でおられたころの教授陣は本当に豪華でした。理論経済学では宇沢弘文先生や根岸隆先生、戦後日本の経済学を牽引した小宮隆太郎先生、それから、私の恩師で金融論の館龍一郎先生も活躍しておられた。館先生は、私が法学部から経済学部に入学したころ、当時まだめずらしかった近代経済学に基づく金融論を講義しておられました。今でも忘れられないのは、講義の冒頭にダンテ『神曲』から、「この門より入る者は一切の希望を捨てよ」が引用され、その言葉で「自分の意見

が正しいと思うなら相手が誰であろうが、屈することなく主張する覚悟を持って」という意を館先生は伝えようとされました。そうした恩師からの教えは、その後の学者人生の大きな糧となりました。

櫻井さんとは一九七〇年代半ば、共著で世界の一流誌に共同論文を寄稿したこともありましたが、その後櫻井さんは経済・金融情勢などの師であります。

櫻井 当時は、私たちの研究がそのまま当時の世の中に当てはまるものではなかったと思います。しかし、市場や制度が整備され、当時の研究の成果が有効であることが分かってきました。研究は、しっかりと将来を見据えながら行わねばならない、ということを改めて感じているところです。

浜田先生は、あくなき探求心をもち続け、経済学に多大な貢献をされてこられました。国際金融へのゲーム理論（注）の応用は、浜田先生が世界で初めてだったのではないかと思います。

浜田 私の専売特許とまでは言いすぎです。私がイェール大学に

留学した時、ハーバート・スカーフ教授がゲーム理論を講義していた、その影響がありました。ゲーム理論では社会を構成する人や企業（国家）をルールに従って行動するプレーヤーとみなします。囲碁や将棋で駒を戦わせるように、金融政策の世界でも、自分の国がある政策を打てば相手の国も打ち手を変えてくるわけです。複数の国々がお互いに影響を与え合うことを考慮すべきなのです。現実社会でゲーム理論が応用されているのは主に経済の分野ですが、本来人間社会の科学的な理解を目的に生まれた学問ですから、国際紛争などの政治の問題や社会の多くの課題にも活用できるはずですよ。

幼少期の芸事で養われた 冷静な視線と豊かな心象

櫻井 浜田先生も私も歳を重ねたからでしょうか、最近は何味のお話をすることも増えてきたように思います。

浜田 宇沢先生が、櫻井さんのことを「艶のある人」と評していたように、櫻井さんは大学院生のこ

ろから女形の歌舞伎役者のような雰囲気がありました。うかがうところによると、岸恵子さんや若尾文子さんなど大女優とともに映画で子役を演じたこともあるそうですね。

櫻井 小さいころの私は浜田先生と好対照ではないかと思いが、読み書きそろばんといった教育はあまり受けていないんです。というのは、六歳のころから日本舞踊のお稽古を始めて、それがすぐくおもしろくて中学に上がるまで続けていたからです。映画に子役で出演したのも、日本舞踊のお稽古の延長だったと思います。撮影は長いと二カ月近く続きます。学校は休むことになりまから、落第しないように出席日数を数えながら撮影所通いをしていました。

ただ、振り返ってみますと、そうしたお稽古事を続けるうちに学校では学べないことが身についていることに気がきました。日本舞踊の稽古場では、さまざまな年代の方がいて、踊りの上手な人や良い形を見て、それをまねながら

（注）ゲーム理論／複数の主体が関わる環境下で、各々の行動や意思決定が自分以外の利害に影響を及ぼす場合において、いかなる行動や選択が最適かを解明しようとする理論。

舞踊を自分のものにしていくしか習得の方法がありません。そのおかげで立ち居振る舞いや礼儀だけでなく、ものを全体として捉えること、そして自分で考える力が養われた気がします。

浜田先生は作曲家でもありますが、小さいころから音楽に親しんでこられたのでしょうか。

浜田 両親が英語の教師だったこともあり、西洋文明に対する目や、キリスト教的な文化が自分の中に自然に入っていました。また、私が幼いころから、父はバイオリン、母はマンドリンを弾いていて、音楽に囲まれた、恵まれた環境で育ったように思います。私が小学生のころ、父が埼玉県熊谷市で女子高校の校長に転任し、家族で郊外の荒川の近くに移ったのですが、田畑の一面にレンゲ草が咲いている風景や秩父の山並みは、私にとって良い情操教育にもなったでしょう。作曲に興味湧き、北原白秋の詩にメロデーをつけたりしていましたね。父の学校の先生から音楽の手ほどきを受けたりもしていました。

櫻井 その後も音楽を続けてこれ、八〇歳で自作曲を収録したCDを出されました。

浜田 親から「音楽は趣味に」と言われて学者の道を選んだのですが、情景の浮かぶ詞があると曲をつけたくなるんです。東京大学在学中には応援歌を作曲し、それが大学内の公募で入賞して、神宮球場で歌われました。その応援歌を東大野球部出身で、日銀の理事もされた南原晃みなはらあきひろさんに東大ホームカミングデー（大学の交流イベント）で聴いていただき、もう一度神宮で歌ってあげるとのうれしいお言葉をいただきました。残念ながら、個性豊かな南原さんは故人となられてしまいました。CDは、日本開発銀行（現・日本政策投資銀行）を経て音楽プロデューサーになった中野雄なかのたけし先生にお世話になったんです。私の楽譜を見てもらったところ、世に出していただく運びになりました。

各国中央銀行にも音楽を愛する方が多い。日銀の雨宮正佳副総裁は音楽に造詣が深く、アメ

リカの中央銀行であるFRB（米連邦準備制度理事会）のリチャード・クラリダ副議長も音楽好きですね。彼と私はイェール大学で同僚だった時期があり、この間久しぶりに会って、私の曲のCDを手渡ししたら、すぐ引き出しから彼の作曲したCDをお返しにくれました。「一生懸命にCDを作ったけど、これでは百ドルも稼げない」と笑っていましたが。

櫻井 浜田先生のお話からも、自身の経験を振り返ってみても、お稽古事や趣味の源泉には知的好奇心があると思います。浜田先生は音楽を通して、私の場合は日本舞踊が上達する過程で、その心が満たされていったのではないかという気がします。

既存のものに捉われるな 新しい発見から創造せよ

浜田 舞踊や音楽などを習うのは、多様な発想ができる人になるために重要だと思います。「かわい子にはお稽古事をさせよ」と言いたいですね。

櫻井 浜田先生は以前から日本の

偏差値教育を批判されていますね。

浜田 偏差値を重んじすぎると、記憶重視で創造性を軽視することになりかねません。日本では暗記や計算を偏重し、とにもかくにも点数が高ければ良い生徒とされる。そういう人ばかりが官庁や大企業に入り、組織のリーダーになつていく、その構造が問題なのです。点数で選ばれたエリート層だけでは、先行きの予測が難しいこれからの時代を乗り切ることはできません。

正直いうと私のキャリアは読み書き偏重、成績重視の日本の教育システムに多大な恩恵を受けているので自分からは言いにくいのですが、読書や書き記憶の得意な人は、六、七十%くらいは創造性や応用力もあると思いますが、中には成績だけが看板みたいなエリートも少なくない。真に創造性のある人が、テストの点数が良くないがために「エリートから外れている」ような状況は、社会にとってマイナスです。

ゼミ生たちを見ると、どちらか



というところ、成績優秀だった人よりも、成績はそれほど良くななくても、創造性がある人、人柄に魅力がある人が大きく活躍しています。

AI（人工知能）の登場で大量のデータ解析などが可能になってきました。でも、そもそもAIに何を記憶させ、計算させるべきかを、先行きを予想しながら、私たちが判断できないと意味がありません。そのためには、テスト勉強をするだけではなく、幼いころから

芸事などを通じた学びも必要なのではないでしょうか。

櫻井 同感です。感動や驚きなどは芸事に触れるなかで出会うことが多いと思います。それを学校で伝えることができるかどうかというとなかなか難しい。読み書きそろばんの点数だけでは測れない力をどれだけ育めるかが重要だと思います。

私がやってきた日本舞踊は独りで演じますので、すべて自分次第です。そういった日本舞踊を通じて身に付いたものが自分の中にしみ込んでいくからでしょうが、仕事においても、周りがどうというよりも、まず自分がどうしたいのかを自分で考えて表現していかねばいけない、と常に思っていました。そうした姿勢や考え方が自分を知らず知らずのうちに成長させてくれたのかもしれない。

浜田 そういうことはあるでしょうね。イェール大学では、医学生が入学すると、まず大学のアートギャラリーに連れて行き、絵画を見せるんだそうです。これは何期印象派の絵だとか教えるの

ではなく、その絵がなぜ人に訴えるのかを考えさせるのだと。デジタル的な要素だけでなく、アナログ的な力も鍛えようとするわけですね。読み書きそろばんの能力を鍛える教育も重要であることは否定しませんが、そればかりでは不十分です。先ほどの櫻井さんの話にも通じますが、芸事から得たアナログな思考力をもっと大事にされるべきです。

櫻井 学生時代、浜田先生は学生に何度も「あなたは、『何か新しいこと』を発見できたか」と問うておられました。また、宇沢先生は「これまでと同じような発想をしてはいけない」が口癖でした。お二人に共通しているのは、既存の在り方に捉われず、新しいものを見つけようとしているかという姿勢。そういう生き方の基本を、私は恩師から繰り返し教えられたんです。

浜田 そう思ってもらえていたとしたらうれしいですね。自分で発見し、何かを創り上げる力を、学生のうちから鍛えてもらいたい。また、周囲に矛盾があれば、けん

かせずにそれを指摘し、説得する能力が必要です。そのためには日本は画一的すぎる今の教育を変えなくてははいけません。学校だけでなく親もです。子どもがやりたいことを見つけ、それを思う存分發揮させることを考えないといけません。

先ほど、成績はそれほど良くなくても、創造性のある、魅力的な人が卒業後活躍している話をしましたが、どうしたらそうした人になれるのか。独立研究者の山口周氏のいうように、「真善美」を追求する時間を持つことが必要だと思います。スポーツも勝つことだけでなく、同様の意味で極めて重要です。良き教育の中で育ってきた人材は、やがて現実の上に理想を追求しながら、自分自身で思い切った決断ができる人になる。そうした人材が技術革新を生み、経営でも行政でも政治でも、これから世の中にもっと必要になると確信しています。

櫻井 本日は、貴重なお話をありがとうございました。